

イデオロギーへの挑戦 —『北と南』における産業とロマンス—

片岡 洋子

(平成21年9月30日受理)

Against Ideology —Industry and Romance in *North and South*—

KATAOKA, Yoko

(Received on September 30, 2009)

キーワード：エリザベス・ギヤスケル、北と南、産業、ロマンス
Key words: Elizabeth Gaskell, North and South, industry, romance

(1) 田園から都市へ

エリザベス・ギヤスケル (1810-65) の第3作目の長編小説『北と南』(1855) は、チャールズ・ディケンズが主宰する雑誌『ハウスホールド・ワーズ』に1854年9月2日号から1855年1月27日号まで連載された。第1作目の『メアリー・バートン』(1848) が出版された時、世間の批評は称賛、批難の両方であり、非難の主なもの、作者が労働者側に味方しすぎて工場主に偏見を抱いている、ということであった。非国教会の牧師の妻として労働者の悲惨な生活を熟知していたギヤスケルが、資本家側の視点から労働問題小説を書く意志は、当時は毛頭無かった。しかし「飢餓の40年代」から50年代となると、経済状況は徐々に上向き、庶民の生活レベルも向上した。この2番目の産業小説では、ギヤスケルは中産階級の人々に注意を向け、若い女性の視点から労資の問題を吟味しようとした。

当初ギヤスケルは、この小説を『マーガレット・ヘイル』という題名にしたが、ディケンズの要請で変更することになった。この経緯が示すように、この小説は社会小説であると同時に、ヒロインの内的成長を追うビルドアップ・ロマンスともなっている。作品の芸術性、及び長い間対立していた2つの階級を和解させるという社会的意義を狙いとする点でも、この小説を成熟の域に達した作品とみなす批評家が多い。本稿では、小説の発展の中で2つの階級の間を移動し、コミュニケーションと理解を促進させる効果的な仲介者としてのヒロイン、マーガレット・ヘイルの役割に注目し、ヴィクトリア朝イデオロギーにおいて厳しく二分されていた私的領域と公的領域、乃至は個と社会がいかに衝突し、影響し合うか、そしてそれがヒロインの

アイデンティティや内的成長とどのように関わるのか、を考察してみたい。

英国国教会の教区牧師を父にもつマーガレットは、品位と慎み深さを感じさせる顔立ち、喜びと希望にキラキラ輝く目をした若い娘である。時代の変化がまだ及ばない南イングランドの田舎ヘルストンの牧師館で、両親と共に快適で自由な生活を楽しんでいる。冒頭の章において、作者がマーガレットをもう一人の若い女性と対比させていることは興味深い。

マーガレットが優雅な休暇を過ごしているロンドンのハーレイ街にある叔母ショウ夫人の豪勢な邸宅では、従妹のイーデイスの結婚を間近に控え、その準備で家の中は慌しくも華やいだ雰囲気包まれている。青いリボンの飾りがついた白いモスリンの服を着たまま客間のソファで身を丸めて昼寝をしているイーデイスに代って、マーガレットは豪華な衣裳を身にまとい、モデルの役をする。叔母が娘の名を呼ぶと、「彼女は眠っています。私に何かできますか？」(1章) と答え、役に立とうとする。イーデイスの日常は主として着飾ること、外出、舞踏会等に費される。結婚に関する取り決めを母親まかせにするイーデイスはその装飾的な価値だけで際立っており、その華美で贅沢な服飾品は彼女のアイデンティティとも言えるものである。牧師館に帰宅した後、マーガレットは「ハーレイ街で自分にとって厄介なことであり、自由を妨げるだけだった贅沢を諦めるべきだ」(2章) と強く思う。

当時の女性にとって存在の第一の目的である結婚は、マーガレットには満足できるものではなく、イーデイスの婚約者の弟で弁護士のヘンリ・レナクスから求婚されるが、彼には友情以上の気持を抱けず、断わることになる。結婚市場における候補者であることを拒絶する彼女は、自身の

才能を発揮できる活動領域を探し求めることが予期されていると思われる。作者が彼女をコンベンショナルなイデーと対比させ、マーガレットがヴィクトリア朝中産階級における女性の行動規範から逸れる者として表現しているのは明らかである。

華美で贅沢な都市における中産階級の生活とは対照的に、ヘルストンではマーガレットは自然、土地、及び田舎の人々との触れ合いを楽しんでいる。彼女の日常の仕事は、赤ん坊のお守り、老人に話しかけたり、本を読んであげること、病人に食べ物を運ぶことであり、間もなく父親が関連している学校で教えることになっている。しかしマーガレットは近隣の人々を訪問し、役立つ仕事を確かに果しているが、彼らとの関係における位置は、恵み深い女性パトロンとしてのそれであり、牧師の娘という理由で彼女にふりかかる役割を単に果しているだけである。彼女は「土地に関係した仕事をしている人たち」を好み、「農民、労働者、見栄をはらない人たち」だけと付き合い、「商売人」を蔑んでいる(2章)。ヘルストンは彼女にとって「テニスの詩歌に登場するような牧歌的な村」であり、またヘンリ・レナクスの問いかけには、「庭いじりのようなきつい仕事は好まない」(1章)と答え、自身の手を汚すような労働作業には嫌悪感を抱いている。マーガレットの階級意識がコンベンショナルな偏見や恣意性に基づくものであることが明らかにされている。

このようなパターンリズムが支配する牧歌的世界は間もなく崩壊する。それを招くのは、国教会の牧師であることに疑問を抱くヘイル氏による国教会からの離脱である。¹⁾それは静かな田舎から騒音と煙が充満するイングランド北部の産業都市への移動を生じさせ、また同時に活動範囲の狭い場所からマーガレットを解放し、自身の仕事を見つける状況へと移動させることになる。そしてそれは彼女の人生において、後に続くいくつかの危機的な出来事の最初のものとなるのである。

(2) 行動する主体として

ヘルストンからミルトンへ移住するという父の決意は、マーガレットに多くの責任を負わせることになり、自ら説明できない父に代って事の経緯を母に説明するのは彼女である。これ迄彼女が決めなければならないことは、正餐にどんな正装用の服を着るかということ、またイデーが自宅でどの正餐会に誰と誰を連れて来たいか、という目録を作る手伝いをする程度のことであった。都市への移転は、マーガレットに成長の変化をもたらす最初のステップである。

国教会の権威を疑い、教区牧師としての権威を失うヘイル氏は家族の長としての本来の責任を負うことができなく

なり、ミルトンへの引越しに関わる計画においてマーガレットが主役を担うことになる。家父長制のもとで難しい決断から保護され、守られてきた彼女は、今や引越しの手伝いにやって来た男達を監督し、冷静に落ち着いて助言を与え、父には「私は自分自身の処理能力を発見したおかげで、くたくたになってしまったわ。」(7章)と叫ぶ。病気の母を診察に来る医者に対しても毅然とした態度で接し、病気について真実を引き出しさえする。自己の内部に新しく見出した能力——観察し、熟考し、決断し、管理し、権威を行使する力——に対する自信は、家族の外の人々と触れ合うにつれて外面にも現われ、彼女の断固とした、威厳ある態度に示されることになる。これは家庭における逆転したパターンリズムと言えるものであろう。

田舎の「草と薬草の香り」のする空気に代って、「煙の味と臭い」がし、「反議員法」の煙(煙突からの煙を制限せよとの1853年の法令を無視した煙)が、小さいレンガ造りの家屋が建ち並ぶ通りや工場の上で勢よく渦巻いているミルトン。ヘイル氏のオックスフォード時代の指導教員で、現在プリマス・コレッジの名誉フェローであるベル氏がその地に不動産を所有しており、借地人の青年工場主ジョン・ソートンへの個人指導の仕事ヘイル氏に推薦してくれたのであった。初対面のマーガレットは最高に美しく、そして軽蔑とも受け取れる冷やかな高慢な印象をソートンに与えるのだった。一方マーガレットは、イングランド北部の工場経営者や労働者たち、無法な荒涼とした地域について嫌悪感を抱いており、「工場の製造業者たちは古典や文学、或いは紳士のたしなみの中に何を求めているのでしょうか？」(4章)と軽蔑するように父親に問うている。ソートンについての第一印象を彼女は、「背が高く、肩幅の広い、頑固そうな、利口で強い、偉大な商人になるような人」(7章)と家族に語っている。北と南、都市と田園を背景にもつ両者の間の、偏見と誤解、対立と牽引はこの小説の主要なプロットの一つを形成することになる。

ミルトンの不健康な環境は、正統な貴族の血をひき、誇り高く、そしてひ弱な体質の母親の健康を蝕むのであり、その病気が致命的だとわかると、マーガレットは母親付きの女中ディクソンに代り、進んで自分が看護に当る。父親に心配をかけまいとして、病気の真実を明かさなままの看護は、マーガレットの心身に大きなストレスを与えることになる。しかし彼女はその仕事の経験によって元気づけられ、主体的に行動する強い女性へと変化していくのである。

(3) 新しい友情

ミルトンの通り²⁾を、大胆不敵な顔をし、大声で笑いふ

ざけながら突進して来る労働者たち、或いは容貌に対する遠慮の無い批評を口に出す彼らの無神経さにマーガレットは驚き、激怒しながらも、何度か遭遇するうちに彼らに親しみを抱くようになり、やがて労働者ニコラス・ヒギンズとその娘ベッシーに出会うことになる。彼らとの交友を通して、マーガレットの外見に見出された「超然としたよそよそしさ」は徐々に消えていく。新しい環境の中で役立つ存在であるために、彼女にとって新しい労働者階級の風習に自分を適応させることを学んでいくのであり、それは世間と交わり、公的な性格をもつ複雑な階級関係に自身をコミットさせようとする、彼女の積極性を意味するものであろう。そのプロセスにおける最初のステップは、個々の労働者階級との密接な絆を作ることである。

ヘルストンにおいてマーガレットは隣人たちには「後援者」として支援してきた。しかしミルトンでヒギンズ父娘に住所と名前を尋ねると、ヒギンズは、「何んでそんなことをお聞きになりたいのかね。」(8章)と逆に質問される。マーガレットが自身を「後援者」として、善意の家庭訪問をしようとする最初の試みは、感謝ではなく、疑いをもって受け取られている。ヘルストンでは、貧しい村人に彼女が名前と住所を尋ねたら、その人を訪問するつもりだということとは自明のことであった。訪問したい理由を述べないまま、見知らぬ人に対する親切的な興味を越えて訪問を申し出たことをマーガレットは恥ずかしく思い、それは彼女の側の失礼な行為だとわかる。彼らの立場を逆転して、ヒギンズは孤独で親切に見える彼女を自宅に招く。これは労働者階級の視点からのパターンリズムの逆転³⁾と言えるものであろう。ヒギンズ父娘との出会いからマーガレットは、新しい社会的関係を学ばなければならない、ということを知り始める。その日からミルトンは、彼女にとって明るい場所となる。それは彼女がその町で人間的興味を発見したからである。

マーガレットは紡績工場で働くベッシーとの会話を通して、工場内の作業の実態を知ることになる。騒音に悩まされながら、心身をすり減らして働く仕事において、綿花の綿毛がベッシーの肺を蝕んできたのであり、「きれいな空気の中で長く深い呼吸をしたい」(13章)という彼女の切望を聞くことになる。風を起こして埃を外に出すために作業室の端に大きな車輪を置いている工場もあるが、高価なためそれを付けてあるのは少数の工場だけであること。また、綿毛を吸い続けてきたためにそれを吸わないでいるととても空腹になり、もしそのような場所で働くことになれば、賃金を上げることを要求する労働者もいること。そこで雇用主と労働者との間で車輪の問題は駄目になること(13章)等。ベッシーの工場には車輪が置かれてはいない。にも拘らず、「あたいの働いている工場はどの部門も大体においていいのよ」と働いている立場上、工場を非難する

ことはない。

病弱なベッシーはマーガレットの励ましによって大きな慰めを与えられる一方で、マーガレットがソートン家の正餐に招かれていることを知ると、その家に関わる多くの情報を提供し、マーガレットの服装を心配して白い絹の服を着て行くことを勧める。マーガレットがストライキに関する労資の対立を初めて知るのにはベッシーからである。母を亡くし、妹や父のために働くベッシーと、病気の母を看護し、家庭を支えるマーガレットの友情の基盤は、家族のために働く義務と責任である。共に19歳の二人の間の友情は、階級を越えた女性の連帯意識⁴⁾を生じさせている。

産業都市に住み、労働者との交友が続くなかで、マーガレットは言語使用においても影響を受け、“slack of work”(「ぐず」を意味する)、“knobstick”(「ストライキ破り」を意味する)のような「嫌なミルトン言葉」を用いることで母親に叱責される。マーガレットは、「もし私が工場町に住めば、工場言葉をしゃべりたい時は必ずそうしますわ」(29章)と答え、母親が下品だとみなす方言は極めて表現に富み、効果的である、と指摘する。労働者階級の言語についてのマーガレットの認識は、彼らの視点に進んで接近しようとしていることを紛れもなく示している。

ベッシーが亡くなり、遺体に会ってくれるかどうかを彼女の妹メアリイに尋ねられると、それが中産階級のやり方ではない故にマーガレットは断わるが、会ってくれることをベッシーが「大きな敬意」と思うであろう、ということを知るとそれを承諾する。そしてマーガレットの物を何か身につけて埋葬して欲しいという生前のベッシーの願いに応じて、マーガレットは彼女のナイトキャップをメアリイに託す。新しい状況が生じると、彼女は自身の中産階級の考えや方法を問い、そして友人の価値観を進んで受け入れようとする適応性を獲得するに至っている、と言えよう。

(4) 嘘・秘密・疑惑

階級間の隔たりを作り出し、永続させる社会構造へのギヤスケルの挑戦は、二分された男女間の領域の扱いにまで拡大する。中産階級のヒロインの物語において、作者は故意に男性の領域と女性の領域との間の境界線をはみ出す一方で、コンベンショナルな家庭のイデオロギーがいかにかにキャラクターの反応を形成するかをも示している。そしてまた、公的領域で行動することに付随する多様な選択や誤解を強調することによって、それに関わるキャラクターの心理を深く掘り下げている。その一つはマーガレットの兄フレデリックに関連するものである。

船員として乗船していた船上で、暴虐な船長に反抗して生じた暴動の首謀者として訴追され、スペインへ逃走しているフレデリックに連絡し、会いたがっている病床の母に

会いに来る手筈を整えるのはマーガレットである。船上における反乱の詳細を作者は語っていないが、英国法により帰国すれば死刑となる兄の嫌疑を晴らし、放免する計画を立てるのも彼女である。無罪証明のチャンスに関して家族で議論をし、家族との再会后、マーガレットは以前求婚され、断った弁護士へのリ・レナクスに相談するためにフレデリックが夜行列車でロンドンへ行くことを提案する。

マーガレットは馬車で兄を駅へ送るのだが、彼は駅で酔った男に搦まれ、その男を振り払って汽車に跳び乗る。しかしその男はその場で倒れ、後に亡くなる。自宅を訪れた警官の訊問に対して、駅にいたことを認め、それによって兄を巻き込むか、又は嘘をついて自身のモラルを危くするか、という厄介な位置にマーガレットは立たされる。結局は兄を守ろうとして嘘をつく。⁵⁾ 一方、偶然通りかかって二人の姿を目撃したソーントンには、彼女の嘘は疑惑と苦痛を与えることになる。ヴィクトリア朝において、夜男性と歩き回る女性は、「墮落した女」の烙印を押されて当然であった。夕方遅い時間に、家から遠く離れた場所で、マーガレットが親しげに、打ち解けた態度で若者と一緒にいた光景はソーントンの心を掻き乱すのである。

治安判事としての権限によりソーントンは検死官に介入し、死因審問はなされないことになる。それを知ったマーガレットは彼の気遣いに感謝の気持ちを抱く一方で、勇気が無く、嘘をついたことで罪の意識に苦悩し、またソーントンの目には自分がいかに墮落した女として映っているか、いかに自分を軽蔑しているか、を考えて思い悩む。そしてそれは彼への尊敬の念へと変化していく。

彼女が今迄空想的な高みから見下げていたソーントン氏が！ 彼女は突然自分が彼の足元にいるのに気がついた。そして自分が失墜していることに不思議なほど心を痛めた。……自分が彼の心遣いと優れた意見をいかに評価しているかを認めた。(35章, 337頁)

ソーントンはマーガレットに恥をかかせないよう、守りたいという思いであった。しかし、あの若者についての彼女の秘密は、彼女に内々の恋人がいると彼に思わせ、それは彼の心に深くささった棘として疼き続けるのである。フレデリックの無事を知らせる手紙に安堵しながらも、マーガレットに頼りきっている父を心配させまいとして、彼女は事の顛末を父には知らせまいと決意する。

秘密を守ろう、そして独りで重荷を背負って行こう。独りで神の前を進んで行こう、そして神の赦しを求めよう、と思った。ソーントン氏が考えている彼女の品格が墮落したという立場に独りで耐えていこうと思った。(35章, 340-41頁)

治安のしもべである警官に嘘をつくという行為は、公的権力という「男性の領域」における直接的行為である。⁶⁾ その結果は、ヴィクトリア朝社会における内と外、私的領域と公的領域との境界線を越えたヒロインの女性性に投げかけられる疑惑、という形で、ヒロインに耐え難い苦悩をもたらすことになる。作者はそのようなヒロインの意識を深く掘り下げ、読者の共感を誘っていると思われる。

(5) 階級の架け橋として

小説における最も重要な事件は、モールバラ紡績工場の所有者ソーントンとその労働者との関係についての、マーガレットの努力と行動である。彼女が労資問題に興味を抱き、また紛争が勃発すると両者の立場を理解しようとするのは、労働者階級のヒギンズ一家との新しい関係によるものである。

2年前から賃金を減らされ、賃上げを要求する労働者に対して、その余裕の無い経営者たち—それをめぐってのストライキが近々ありそうだ、と予測するソーントンに対して、「経営が悪化すると思うしっかりした理由を、労働者に説明すべきだ」(15章)と、マーガレットは主張する。それに対してソーントンは、「資本家たちには支出額について、或いは自身の金をどう適用するかを決める権利がある」と答える。労働者にとって専制政治が最高の政治体制であり、雇用主は彼らに対しては独裁者でなければならない、と彼は自信をもって答える。マーガレットは、「あなたも他のどんな雇用主も、他人に頼らず自分の力だけでやっていくことはできない。神様は我々を互いに頼り合うべきものであるようにお造りになった」と述べ、人間の依存関係に注意を向けさせる。

ソーントンの口から出てくる労働者を表わす用語“hands”そのものが、十分な人間性において彼らを見るのではなく、市場商品を生み出すことができる身体の一部としての「手」のみを考えることから生じた語である。経済単位としての労働力に関して、もっぱらビジネスの視点から考えるソーントンの傾向に対して、その人間性を無価値なものとする考え方にマーガレットは怒りを覚えるのである。工場主の不当な待遇に対する労働者の苦情についてのヘイル氏とソーントンのやりとりの後、作者は「たぶん彼(ソーントン)は迅速で無慈悲な改良や変革の中で無視されている労働者たちの運命に、それほど同情できなかったようだ。」(19章, 180頁)と客観的なコメントを与えている。

「飾り錨のように頑固で、どこを触っても梃子でも動かないブルドッグのような男」(17章)とヒギンズによって形容され、労働者にとっては残酷、非情と思われているソーントンは、一方では家族思いであり、特に夫亡き後息子と娘を育て上げ、家庭をしっかり切り盛りし、現実的で

厳格でもあり、有能な息子を誇りに思う母親を大切に思っている。またヘイル一家に対しては常に優しい気遣いを示し、母親の病気に関する費用のことで、マーガレットに援助を申し出させする。その思いやりと、経営の原理を規定し、それに沿って事業を進める、理性的すぎる無慈悲な工場経営者としての方法が、一つの不協和音としてマーガレットの神経に触るのであった。ソントンについては後にヒギンズも、「古い工場主のタイプと、バウチャーの子供たちの学費を心配する人情ある男」(40章)という彼の二面性を指摘しているのは興味深い。

組合の委員であるヒギンズはマーガレットに、ストライキをするのは近隣に住み、病気の妻と職工年齢に達していない(9歳になっていなくて、法律上工場で働けない—1833年当時)8人の子供をかかえたジョン・バウチャーのためである、と語る。しかし後にスト破りをし、ストライキを挫折させた裏切り者として、彼がヒギンズから批判されるのは皮肉である。父が自殺し、母が病死して孤児になったバウチャーの子供たちに、マーガレットは食べ物や金を与え、勉強を教えることになる。産業や経営という「公」の領域において男たちが種々の局面で対立し合う表面下で、貧しく弱者たちの世話をし、飢えを直接満たすことができるのは、慈愛豊かなマーガレットや近隣の女性たちであることが示されている。

ストライキをする労働者に対抗して、ソントンはアイルランドから労働者を連れて来て働かせるが、それに怒った労働者の群れが工場を襲おうとしている。ソントン家に居合わせたマーガレットは、「臆病でないのなら、今すぐ下りて行って、直接労働者たちに人間らしく、優しく語りかけるよう、そして哀れなよそ者たち(アイルランドから来た労働者)を救うよう」(22章)ソントンを説得する。木靴をしっかりと両手に握った若者たちの身振りから、その意味を悟った彼女は玄関に飛び出し、敵の前に立つソントンの首に両腕をさっと回し、自分の体を楯にして獐猛な人々から彼を守ろうとする。彼女は暴徒たちに向かい、「後生だから! この暴力であなたたちの主義主張を駄目にしないで」と叫ぶ。猛烈な勢いで飛んで来た小石が彼女の顔をかすめ、彼女は血を流し、意識を失い、ソントンの肩にもたれかかる。それを見て退去する暴徒たち。この劇的な場面において作者は、ヴィクトリア朝社会においては女性が立ち入るべきではない領域にマーガレットを置き、彼女にソントンを説得させ、女である彼女自身から助言を受け取るようにさせている。男性に教諭す女性を示すことによって、作者はコンベンショナルなジェンダー観を逆にしているのであり、女性が持つことのできる社会的責任の可能性を示していると思われる。⁷⁾しかしながら、投石とその結果により、有罪性は工場主から労働者へ移行し、襲撃の動機であった産業の問題が偏向してしま

った、という印象は否めないであろう。

マーガレットが公的調停者という位置を占める時、彼女は群衆に身を曝し、見つめられ、体に傷を負い、「身もちくずした女」⁸⁾と誤解されたことで自分を恥ずかしく思う一方で、ソントンから愛を告白される。彼女の行為に対する彼の反応において、公と私の相互浸透を見出すことができるであろう。マーガレットは彼女の行為の公的性質を主張する一方で、ソントンは彼女の行為を愛情の表現、つまり私的感情の現われとしてみたいと思う。彼が彼女への愛を口に出すと彼女は直ちに抵抗し、彼女の行為が私的行為であったことを否定し、そして「どんな女性でも危険の中にいる男性を守ろうと進み出るでしょう」(24章)と言明する。この場面で女性が男性のために公的立場をとり、男性がロマンス、つまり私的世界を求めて話す時、性差が逆転することは興味深い。⁹⁾マーガレットの行為は明確に政治的である。しかし潜在意識においては私的でもある。ソントンの告白の後、マーガレットは彼についての心底の思いに直面させられ、一方マーガレットの行為についての記憶は彼の意識の中で強固な一つの核として留まる。両者共、牽引と反発というアンビバレンスな思いの中で葛藤し、それは究極的には自己と他者への理解を導くことになるのである。

(6) ヘルストンの薔薇

労働者が「全く思慮の無い従順さをもつ、背の高い大きな子供であって欲しい」(15章)と思う雇用主の要求に、マーガレットは賛成できず、彼らを敬意をもって扱われるべき大人として考える。¹⁰⁾ストライキを抑圧された者の目的を挫くものとしてみる彼女は、労働者と雇用主との平等な関係を支持し、ヒギンズとソントンが共に人間らしい心で話し合うことを望み、両者間のコミュニケーションを提案する。自身を和解と変化の仲介者とみなすようになる彼女は、失業中のヒギンズに工場での仕事を求めてソントンのもとへ行くよう勧める。組合のリーダーであったヒギンズは一旦断られるものの、彼の人間性を理解したソントンは、彼を雇用することになる。階級を越えた人々のコミュニケーションは、後には経営者と労働者が個人的関係を形成するであろう場—食堂の建設をもたらすことになる。取り引きが悪化し、ソントンが重大な損失を蒙ると、労働者は彼を支援するために集まり、誰にも知られずに仕事をし終えるために徹夜です。彼は労働者とのこの新しい関係を認識し、下院議員の一人に「私の唯一の希望は、単なる『金銭的關係』を越えた雇い人との付き合いのようなもの深める機会をもつことなのです。」(51章)と語り、それが階級と階級を結びつけるものだ、と述べている。

小説の最終段階において、作者はヴィクトリア朝小説の

ヒロインに共通する授かり物として遺産の継承を用意する。それはマーガレットの名付け親で父の友人であるベル氏の死によるものであり、その突然の所有は彼女に倫理的試練を与えることになる。

彼女は……いつの日か自分自身の人生に責任を負わねばならないことを、そしてこれまで彼女が対処してきたことを自覚したのである。そして彼女は女性にとってのあの最も困難な問題、つまりどれほど多くのものが完全に権威に服従しなければならないか、そして働くときの自由のためにどれほどのものが取り除かれていいのか、という問題を解決しようとした。(49章, 497頁)

この海辺での思索は、彼女のこれまでの人生を吟味し、将来の方向についてある決断をする機会を与えることになる。

経営の悪化によりソーントンが倒産の危機に迫られると、彼が工場の操業を続けられるよう、そして彼が計画する改革へ向かって仕事が続けられるように、今や工場の地主となったマーガレットは彼に資金援助をする。彼がその援助に抵抗するかもしれないと気づいて、銀行よりも高い利子を彼女に払うことを、「単なるビジネスの取り決め」として彼に申し出るのである。この結末の場面において、作者は私的な動機と公的な行動との相互作用を巧みに扱っていると言えよう。彼女の行動が、ミルトンで関わってきた公的な活動を持続させるための誠実な努力であることは明らかである。しかし彼女がソーントンに深い感情を抱いていることも示唆されてきた。この脈絡の中で、彼女は公的であり私的でもあると理解される措置をとり、その私的動機をす早く感知したソーントンは、彼女の名前を優しく呼ぶことで応答する。その声に赤面し、顔を隠した彼女の両手を取り去り、「以前に彼を暴徒から守るためにしたように」(52章)彼女の両腕を彼の首のまわりに巻きつける。この絵画的描写はあの公的な場面の再現であり、しかしこの時は私的な状況におけるものである。

ソーントンの手帳に挟んでもっていた薔薇の押し花は、逆境のどん底にいて彼女を得る希望がなかった時でも優しくしてくれた彼女が、そんな女性に育った場所を見たい、という思いで訪ねたヘルストンの薔薇であった。マーガレットのアイデンティティを知るための手がかりの探求への言及は、彼女の人間性への彼の深い思いと理解を示唆しており、薔薇の押し花は二人の絆の象徴であろう。彼らの結婚において、両者が私的、及び公的な領域で共に仕事をすパートナーとなること¹¹⁾、そしてその2つの領域が結びつくことを、作者はロマンチックな方法で示していると思われる。

終り

Text: Elizabeth Gaskell, *North and South* (1855, rep. New

York: AMS Press INC, 1972) 日本語の引用文は、ギャスケル全集 4、『北と南』, 朝日千尺訳 (大阪教育図書, 2004) を参照した。

註

- 1) このエピソードは、Gaskellが追及することに失敗している、動機のない、又は誤まった始まりとして、しばしば批判されてきた。Winifred Gerin, *Elizabeth Gaskell* (Oxford: Oxford University Press, 1980), p.151, 他。
- 2) 19世紀において‘streets’は女性達によって浸透され始めた公的な、またそれ故男性的な活動領域の強力はメタファーとなった、とDeidre d’Albertisは述べている。 *Dissembling Fictions, Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text* (Houndmills and London: Macmillan, 1997), p.47.
- 3) Rosemarie Bodenheimer, *The Politics of Story in Victorian Social Fiction* (Ithaca: Cornell University Press, 1988), p.58.
- 4) Robin B. Colby, *Some Appointed Work To Do, Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell* (Westport, London: Greenwood Press, 1995), p.53.
- 5) Gaskellは、「隠匿、偽装」を家庭責任、及び社会的弱者に及ぼす中産階級の女性達の力を理解する鍵としてみている。 d’Albertis, p.64.
- 6) この小説のコンベンショナルなプロットによって、社会的現状の転覆というラディカル性が覆い隠されていることを、Patricia Inghamは強調している。 *Language of Gender and Class, Transformation in the Victorian Novel* (London & New York: Routledge, 1996) p.5.
- 7) Gallagherは、女性が男性に行使する倫理的影響力は、この小説において公的生活と私的生活を結びつける力である、と述べている。 *The Industrial Reformation of English Fiction, Social Discourse and Narrative Form, 1832-1867* (Chicago: University of Chicago Press, 1985) p.168.
- 8) マーガレットはマグダラのマリアを喚起させる、とElsie Michieは述べている。 *Outside the Pale, Cultural Exclusion, Gender Difference and the Victorian Woman Writer* (Ithaca: Cornell University Press, 1993), p.133.
- 9) Colbyも言及している。 p.58.
- 10) Bodenheimerは雇用主を親、労働者を子供としてみるパターンリズムのメタファーを覆すことでGaskellに功績があるとみなしている。 pp.54-55.

- 11) Forster は私的領域と公的領域の間に同じ関係を見ており、Gaskell が、心理の応答の中心にある女性の力は男性支配の環境において真の革命的力であることを示唆している、と述べている。Shirley Foster, *Victorian Women's Fiction: Marriage, Freedom and the Individual* (London & Sydney: Croom Helm, 1985), p.148.

Summary

North and South, Gaskell's third novel, is not only an industrial novel, but also a Bildungsroman which follows the heroine's inner growth. This paper focuses on the heroine's role as an agency who moves between middle class and laborer class, promoting communication and understanding. Then the paper examines how the public sphere and the private sphere conflict and influence each other, and how that is related with the heroine's identity and inner growth.